

戦争と道義——日本の天職論をめぐる問題——

松井 慎一郎

はじめに

ロシアのウクライナ侵攻は一年を経過してもなお解決の糸口を見出せないままである。北朝鮮からの弾道ミサイルも頻繁に発射され、台湾有事も騒がれるなか、我が国の国防が注目されるとともに、かつて経験した対外戦争の記憶が呼び起こされつつある。多くの国民が思い起こす戦争とは、いわゆる「大東亜戦争」、すなわちアジア・太平洋戦争である。経験者が未だ多く生存するということもさりながら、有史以来最も多大な犠牲者を生んだ敗戦であり、その後、猛省して「平和国家」を創り上げてきたという自負もあって、今日においても強烈な印象をもたらしているからであろう。

「大東亜戦争」を語る上で、我々が強く意識しなければならな

いのは、なぜ、三一〇万人という多くの人命（うち民間人は八〇万人）が失われてしまったのかという点である。しかも、その大部分がサイパン島陥落から敗戦までの「絶望的抗戦期」に失われている。^{〔1〕}サイパン島陥落以降、新型大型爆撃機B29の都市爆撃が日常化していることから、「絶望的抗戦期」における民間人の犠牲者数は、それ以前と比較して圧倒的に多くなっていることは容易に推測できる。私事で恐縮だが、一九四五年八月一四日夜半、私の母は疎開先の群馬県高崎市の伯母の家で空襲に遭って焼け出され、九死に一生の体験をしている。この時、母が亡くなっていれば、私もこの世に生を受けておらず、この文章自体存在していない。

つまり、サイパン島陥落の時点で終戦を迎えていれば、多くの人命を救うことができたのである。徹底抗戦にこだわる主戦派が軍の主流であったことに加えて、講和派も国体護持を目的にソ連

を仲介役としたため終戦工作の時機を失ってしまったことが「絶望的抗戦期」を長引かせた主要な原因である。しかし、空襲や動員によって日常的に自らの生命が危険に晒されようともし「一億玉碎」のスローガンの下で耐えてきた国民の意識こそ大きな問題ではなかったか。それは、戦時体制下に強化されていった言論・思想統制の成果、あるいは日本人特有の同調圧力によるものとの解釈も可能だろうが、多くの国民が極限状態に陥ってもなお戦争を止めることができなかつたのは、より積極的自発的な要因が存在していたからではないだろうか。

「大東亜戦争」時、或る少女は、購読していた少女雑誌（『少女の友』一九四二年二月号）に「私の考へではたとへどの様な場合に直面しても乙女の心の泉のうるほひは失ひたくないと思ひますの日英米戦争が始まつても、私達は世界の一等国の少女としてより高き理性と人の美しさをなほ一そう養はなくては、ならないぢやないでせうか？」との文章を投稿している。²⁾「世界の一等国の少女」としての自覚を有していた少女は、戦争という非常事態に突入しても、「より高き理性と人としての美しさ」を養うことを決意していたのである。「大東亜共栄圏」建設という前代未聞の「偉業」を目的とした「聖戦」を戦う上で、国民における「世界的一等国」であるとの自己認識は大きく作用したに違いない。し

かも、その「世界の一等国」とは、日露戦争勝利後に頻繁に登場した「富国強兵」という意味での「一等国」ではなく、³⁾「高き理性と人の美しさ」という表現からわかるように、世界に冠たる精神大国・道義大国という意味であった。

ところで、そうした精神的な「世界の一等国」という意識は、「大東亜戦争」を戦うなかで上意下達式に押し付けられていったものであつたのだろうか。米英との戦争に踏み切つた日、「帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」とする戦争目的を明記した宣戦詔書が出される一方で、詩人高村光太郎は、「危急の日に」と題する詩を発表し、「われは義と生命とに立ち、／かれは利に立つ。／われは義を護るといひ／かれは利の侵略といふ。／出る杭を打たんとするは彼にして、／東亜の大家族をつくらんとするは我なり」と、自存自衛とは異なる、「東亜の大家族」（大東亜共栄圏）の建設という道義的な目的を掲げた。⁴⁾高村に限らず、米英との戦争に直面して、多くの国民の脳裏をよぎつたのは、自国の生存という切実な目的とともに、今こそ道義大国としての使命を果たすという高遠な目的であつた。そうした国民の反応に応じて、開戦から四日後、内閣情報局により、「大東亜新秩序建設を目的とする戦争」という意味から「大東亜戦争」なる名称が発表されるようになったのであろう。つまり、

精神的な「世界の一等国」という意識は、或る一定の年月をかけて、国民の間に培われていったものと考えられるのである。

大日本帝国憲法制定前後の時期より、日本の天職や使命とは何かを説く言論が登場する。それは、「大東亜戦争」期まで見られるものであり、終戦によってぱったり途絶える。松本三之介は、日清戦争後より「日本国民が世界にむかつていかなる態度をとるべきか」という新しい思想的課題が登場し、その後、日本が戦争に勝って国際的地位を高めるとともに切実な意味を持つようになったとして、大正デモクラシー期までの「国民的使命感」の歴史の変遷を明らかにしている。⁽⁵⁾しかし、姜克實が指摘するように、松本のいう「国民的使命感」は、岡倉天心や徳富蘇峰らの言説に見られる「実力」を背景にした「強国意識」であり、石橋湛山の「小国」主義のような思想的マイノリティは含まれない。⁽⁶⁾また、ケネス・B・パイルは、近代化・文明化という観点から自己不信に陥っていた日本人に誇りを持たせようとして、一八九〇年前後に、三宅雪嶺をはじめとする政教社の思想家たちが、日本が世界の文明に貢献すべく日本独自の国民的特色を発揮させる使命、すなわち「国民的使命」を持っているという言論を展開しはじめたことを指摘している。⁽⁷⁾

本稿では、先行研究の「国民的使命感」という概念にはこだわ

らず、思想的メジャー・マイナー、大国・小国意識の区別はつけず、イデオロギーや宗派の枠に囚われることなく、一八九〇年前後から敗戦までの約五十年におよぶ、日本の天職や使命を説いた特徴的な言説を見ていくこととする。

一 明治憲法制定前後（一八九〇年前後）

日本の天職・使命について直接論じたものではないが、一八八八年八月に発表された中江兆民「外交論」は、ロシアやイギリス等の強大国との軍事同盟を否定して非同盟中立を主張した論説で、以下の結尾の文章は、帝国主義の国際情勢の中で欧米列強に阿ることなく、仁義にしたがつて堂々たる立場を貫くべきことを説いている。

論者動もすれば云ふ我日本は小国なり貧国なりと貧は誠に貧なるも小とは云ふ可らず人口を算するに伊国仏国に比して莫大の差有るに非ず白耳義瑞西に視るときは洋々たるの一大邦とも謂ふ可し嗚呼三千許万の丈夫児が相ひ倚りて一大団結を為し日本国とか蜻蜒洲とか一箇の邦国を成しながら惴々焉として外国人の鼻息是れ何ふて僅に独立を図るが如きは実に浅間敷の限りに非ずや第十九世紀如何に未開なるも万国公法如

何に無力なるも我儕三千余万の大男児が相ひ抱持して一体を成し仁に仗り義を執り彼れ列国或は無礼を我に加ふるに於ては我儕三千余万の大男児が皆悉く一死以て自ら潔ふするに決心し全国焦土と為るも辞せず彈丸雨注するも避けず義と俱に生じ義と俱に斃れ瑣々たる利益便宜の鄙情を一点も胸中に存せざるに於ては彼れ列国の兇暴なるも何ぞ畏るゝに足らん第十九世紀の今日に於て亜細亜の一孤島に於て全国民討死と一決して一步も退かざるの心を持って打失せざる時は一陣道德の大風颯然として西向し歐洲諸国の政界部に堆積せる利己的汚穢の雲霧を一掃して余り有るを得ん⁸

西洋列強の圧倒的な軍事力によつて国土を蹂躪されようとも、国民が一致団結して道義を貫き「討死」の覚悟で事にあたれば、「道德の大風」が西に向かい、欧米列強の利己主義は取り除かれるであろうと主張するのである。つまり、世界に対する日本の道德的使命を説いているといつてよい。「東洋道德・西洋芸術」（佐久間象山）に象徴されるように、幕末から明治にかけて、多くの知識人が日本もしくは東洋の道德的優越性を主張してきたが、ここで、兆民はそうした道德的感化を西洋にまで及ぼすべきことを大言壮語的に述べてみせたのである。負け犬の遠吠え的な側面も多分に感じられるが、「我儕三千余万の大男児が皆悉く一死以て

自ら潔ふするに決心し全国焦土と為るも辞せず彈丸雨注するも避けず義と俱に生じ義と俱に斃れ」という表現は、「大東亜戦争」末期における「一億玉碎」の精神を彷彿させる。自由民権運動の理論的指導者として知られる兆民が、昭和の軍部と同じような表現を用いていたことは刮目に値する事実である。

「国民論派」を標榜した陸羯南は、最も早い時期に日本の天職論を説いた思想家である。⁹「日本は東洋建国の師表たるべき天職あり」と述べる羯南は、さらに「外政の目的たるや其の高尚なる点に於ては嘗に一国の独立を保つのみにあらず、又た各独立国の間に権力の平衡を持って世界の平和を保たざるべからず」と、世界平和に貢献すべきだとする壮大な日本の使命を説く。¹⁰憲法制定から日も浅く、条約改正すら実現できていない時期におけるこうした気宇壮大な自信の根拠が「万世一系の国体」、すなわち「地球上に建国する国民にして、振古草昧の初めより文明日進の今日に至るまで、嘗て建国の基礎を動揺せしことなく、整理たる秩序を踏んで進歩したる者は、我が国を置いて一も見ざる所なり。是れ蓋し大和民族が歴史上に於ける無二の名譽¹¹」という点にあったことは疑えない。こうした万世一系の国体こそ世界に誇るべき日本の特質であるという論理が「大東亜戦争」期に猛威を振るうことになるのは周知の事実である。

この時期における日本の天職論として代表的なものが、内村鑑三「日本国の天職」（一八九二年四月）である。¹²キリスト教の観点から「人類終局の目的あり又人々各々天職ありとする時は国民なるものも亦一の集合躰にして相抱て以て人間界を組織するものなれば宇宙に目的あると同じく又一個人に天職あると等しく各国民にも是に特別な天職あつて全地球の進歩を補翼すべきものなり」と考へる内村は、アメリカ留学中にアマースト大学で学んだ歴史学と地理学の知識を参考として、以下のように、日本を「東西両洋の媒酌人」として位置付けた。

日本は東洋并に西洋の中間に立つものにして両洋の間に横たはる飛石（フライングストーン）の位置に居れり、風并に海流の方向は東西両洋間に航海する船舶をして我横浜港に寄港せざるを得ざらしむ、日本国本土は其背部を広漠たるシベリヤ并に満州海岸に向くと雖も其腹部は西洋文明の粹を受けつ、ある所の米国に向け、右手を以て欧米の文明を取り左手を以て支那并に朝鮮に之を授け渡すの位地に居るが如し、日本国は実に共和的の西洋と君主的の支那との中間に立ち基督教的の米国と仏教的の亜細亜との媒酌人の位地に居れり¹³

「文明西漸論」の立場をとる内村からすれば、「東西両洋の媒酌人」とは言いながらも、東洋の文明を西洋に紹介するという意味

はさほどなく、あくまでキリスト教をはじめとする西洋文明を東洋に伝えることが目的であった。後述するように、こうした西洋文明の紹介者としての天職論が日清戦争時に義戦論を展開させることとなる。

一八九〇年の第一回衆議院議員選挙に出馬当選して以来、連続二十五回当選、後年「憲政の神様」と称される尾崎行雄も、この時期、日本の天職論を主張している。以下のように、尾崎は「東洋の盟主」としてだけでなく、「平和の天使」としての日本の天職を主張する。

吾人の天職は、啻だ東洋の盟主と為るに止まらざるなり。只だ立憲政躰を完成し、道義の勢力を以て、亜細亜列国を風靡し、清、韓、暹、緬、印等の諸国をして、立憲政体の福恵に浴せしむるに止まらざるなり、吾人の天職更に是れより大なるものあり、平和の天使と為て、文明の化育を六合に遍満せしむる則ち是れなり。¹⁴

ここでいう「平和の天使」とは、「文明の化育を六合に遍満せしむる」という表現からわかるように、立憲政体をはじめとする近代化・文明化の波を世界に及ぼすという意味ではあるが、それは、西洋列強と歩調を同じくするというより、以下のように、西洋列強に先んじて、日本が文明の力で世界に平和をもたらすとい

うものであった。

我れ若し天下に卒先して、平和の天使と為らば、他の文明国は慚耻の心に堪へずして、漸く將に我に倣はんとす。是に於て乎地獄は變じて天堂と為るべく、殺人器は化して活人器と為るべし、宇内幾億の生靈を卒て、塗炭の惨苦を超脱せしむるの法計、只だ是れあるのみ。⁽¹⁵⁾

度重なる条約改正交渉の失敗や立憲政治の不安定（第一帝國議會以来の藩閥政府と民党間の対立）は、近代国家建設に邁進してきた多くの日本人の自信を喪失させた。西洋文明を受容しながらも、西洋列強とは違う日本独自の天職を見出し、そこに国民的自尊心を見出そうとする言論が登場したと考えることができよう。

二 日清戦争期

日清戦争は、壬午軍乱以降の朝鮮をめぐる対立から引き起こされたという過程もあり、朝鮮の近代化を阻む清国を日本が懲らしめる大義の戦争という視点から捉えられていった。勃発直後に発表された『時事新報』の社説「日清の戦争は文野の戦争なり」はその代表的なものである。⁽¹⁷⁾

戦争の事実は日清両国の間に起りたりと雖も、其根源を尋ぬ

れば文明開化の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものとの戦にして、決して両国間の争に非ず。本来日本人は支那人に対して私怨あるに非ず、敵意あるに非ず。之を世界の一国民として人間社会に普通の交際を欲するものなれども、如何せん、彼等は頑迷不靈にして普通の道理を解せず、文明開化の進歩を見て之を悦ばざるのみか、反対に其進歩を妨げんとして無法にも我に反抗の意を表したるが故に、止むを得ずして事の茲に及びたるのみ。即ち日本人の眼中には支那人なく支那国なし。只世界文明の進歩を目的として、其目的に反対して之を妨ぐるものを打倒したるまでのことなれば、人と人、国と国との事に非ずして、一種の宗教争ひと見るも可なり。⁽¹⁸⁾

ここでは、世界における文明化を必然的なものと捉え、それを阻む「頑迷不靈」の清国に対して、世界の文明国を代表して日本が征伐するという枠組みで日清戦争が捉えられている。これは、戦争の正当性を内外に訴えるという意味もあったが、戦争勃発直前にイギリスとの間で日英通商航海条約を調印、長年の課題であった領事裁判権の撤廃に成功し、同様の条約をその他の列強と締結することが次の課題であり、文明国であることを殊更強調する必要があったと考えられる。

同じく「文明対野蛮」の公式で日清戦争を捉えたのが、かつて日本を「東西両洋の媒酌人」と位置付けた内村鑑三であった。内村は、ペルシア戦争、ポエニ戦争、英西戦争を例にあげ、「新文明を代表する小国」が「旧文明を代表する大国」と衝突し、前者が後者に勝利するのを人類史の必然と捉え、日本を「東洋における進歩主義の戦士」と捉え、「義戦」として戦争を正当化したのである。

歴史的考察に移らんに、日支の衝突は免かる可からざる者ならずや、新文明を代表する小国が旧文明を代表する大国と相隣して二者終に必死の衝突に來らざる事は歴史面上未だ曾て其例を見ず 希臘対波斯、羅馬対カルタゴ、エリザベス女王の英国対フヒリツプ二世の西班牙——是等は吾人が此所に記載する双体の著しき例なり、而して両者衝突してマラソン激戦となり、ザマ血闘となり、常勝艦隊の入寇となりし事は両主義の和合すべからざるが如く避く可からざる事なりき、而して人類の進化歴史に於て摂理は常に小をして新を代表せしめ、大をして旧を代表せしめたり、是れ蓋し肉に対して靈を試み、量に対して質を練らんが為めなるべし、而して二者衝突するや幾多の運命循環の後に勝利の冠は常に小にして新なるもの、上に落ちたり、是れ蓋し人類が活ける靈を貴び死す

る肉に頼らざらんが為なるべし、今や再び世界絶東の地に於て同一の大教訓は人類に示されんとす、新にして小なる日本は旧にして大なる支那と衝突せり、朝鮮戦争の決する所は、東洋は西洋と均しく進歩主義に則るべきや、或は曾て波斯帝國の保護する所たりし、カルタゴの方針たりし、西班牙の奨励せし、而して十九世紀の今日滿洲的支那政府が代表する退歩の精神は東洋全躰を指揮すべきやにあり、日本の勝利は東洋六億万人の自由政治、自由宗教、自由教育、自由商業を意味し、日本の敗北と支那の勝利は其結果たる吾人の言を煩はざすして明かなり。(中略) 日本は東洋に於ける進歩主義の戦士なり、故に我と進歩の大敵たる支那帝国を除くの外日本の勝利を望まざるものは宇内万邦あるべきに非らず。¹⁹⁾

「我は朝鮮を開んとするに彼は之を閉んと欲し、朝鮮に課するに彼の滿洲的制度を以てし、永く属邦として之を維持し、支那其れ自身が世界の退隱国なる如く朝鮮もその例に倣ひ、世界の進歩に逆抗せしめん事を勉めたり」と述べているように、「世界の退隱国」たる清國の魔の手から朝鮮を解き放ち、東洋の文明化を促進するというのが日清戦争の目的であり、それは人類史の法則に適っていると考えられたのである。この時期における内村は、朝鮮をめぐる日清間の実情を正しく認識していたわけではなく、強

引に人類史の法則に当てはめようとする嫌いがあった。日清戦後、日本が敗戦国・清から台湾をはじめとする領土と多額の賠償金を得、さらに、閩妃殺害事件（乙未事変）が発生、日本の朝鮮への野望が明確になると、「義戦若し誠に実に義戦ならば何故に国家の存在を犠牲に供しても戦はざる」と投げかけ、義戦論を撤回するに至る。⁽²¹⁾

この時期、尾崎行雄も「四億の生霊を塗炭の中に拯ふて、之を開明革新の途に就かしめ、以て人類の恵福を増進し、以て列国の利源を開通するは、是れ王者の盛徳にして亦帝国の天職なるに非ずや」と、文明化させることでアジアの民衆を救済し、さらには、西洋列強の利益をはかるという天職を果たすべき絶好の機会として日清戦争を捉えていたのである。

いずれにせよ、こうした言論人たちの日清戦争正当化の論理は、国民をして、日本を文明国の一員と認識させ、アジアあるいは世界の文明化に寄与する天職・使命があることを意識させたと考えられる。

三 帝国主義全盛期（一九〇〇年前後）

幸徳秋水の代表的著作『廿世紀之怪物 帝国主義』（一九〇一

年）に象徴されるように、一九〇〇年前後は、西洋列強による政治的・経済的侵略、すなわち帝国主義が全盛を迎えていた。とくに、日清戦争後における列強における中国進出は日本の対外政策にも大きな影響を与えていた。しかし、そうした帝国主義国家間の対立が激しくなるにしたがい、それに抵抗する形で国際協調の動きも生じた。一八九九年、ロシア皇帝ニコライ二世の提唱により、

二十四カ国が参加してオランダ・ハーグで開催された第一回万国平和会議は、その象徴的なものである。日本国内においても、一八九七年に寺尾亨・高橋作衛・山田三良らによって国際法学会が設立されるなど国際協調に向かう動きが一部に生じていた。法律家の渡部万蔵は、「世界の大勢は統一的に進運し、漸次平和時代に近きつ、あるは古今一貫の大事実なり」と認識し、「然らば則ち我大日本帝国は始終一貫公明正義を以て国際に処し経道廓如緯権制機世界の平和を計り、後進を誘導し、微弱を助け強暴を論じ、人類の幸福文明の恩沢を宇内に普遍せしむるを以て其天職となさんか」と、世界平和への貢献という日本の天職を主張した。

意外なことに、国際協調路線こそ日本の天職・使命であるという主張は、日露戦争勃発直前まで存在していた。小学校教員で地理学者であった牧口常三郎は、日露戦争勃発三ヶ月前の一九〇三年一月に出版した『人生地理学』において、人類の発展とともに

に生存競争の形式が「軍事的競争」「政治的競争」「経済的競争」「人道的競争」の四段階へと変化すると指摘した。²⁵⁾「人道的競争」とは、以下のようなものであった。

人道的競争形式とは如何。従来武力或は権力を以て其領土を拡張し、成るべく多くの人類を其意力の下に服従せしめ、或は実力を以て其外形は異なるとも、実は武力若しくは権力を以てしたると同様の事をなしたるを、無形の勢力を以て自然に薫化するにあり。即ち威服の代はりに心服をなさしむるにあり。自己主義に其領土を拡張し、他国を征服せずとも風を臨み、徳に懷づき、自ら来る所の仁義の方法これなり。人道にかなふことは是れなり。是を以て現在の国際間に臨まんとことは頗る突飛なるが如しと雖も、個人間の生存競争に於ては既に々々に認められし所なれば、国際間に於ても亦た適用せられざるの理なし。(中略)要は其目的を利己主義にのみ置かずして、自己と共に他の生活をも保護し、増進せしめんとするにあり。反言すれば他の為めにし、他を益しつ、自己も益する方法を選ぶにあり。共同生活を意識的に行ふにあり。²⁶⁾

そして、牧口は、日本が米英とともに、「人道的競争」を展開して、世界平和に貢献していくべきだとの壮大な構想を抱いていたのである。

将来の世界の平和は恰かも大なる「小」字形に排列せらるゝ、日米英の三国によりて維持せられ、依て人道的競争形式に基きて生ずべき文明は発達せらるべきものなるからんか。兎も角も吾人は茲に至りて将来の文明に於ける日本の位置の多望なるを認めざる能はず。不知、四千万の大和民族は果してよく此天与の地位を利導し得べしや否や。²⁷⁾

後年、日蓮仏教に帰依して創価教育学会(のちの創価学会)を設立して「広宣流布」の運動に邁進する牧口であるが、この時点では日蓮仏教に巡り合っていない。この時期、在家の立場から日蓮仏教の現代的意義を積極的に唱えはじめていたのが田中智学(巴之助)であった。田中は、「純妙ノ大法」である日蓮仏教をもって日本が世界を靈的に統一する天職があると主張した。

純妙ノ大法ニアラザレバ、理ニ於テモ、力ニ於テモ、宇内ヲ靈的二統一スル能ハズ、宗教ノ五義、三大秘法ハ正シク其設ナリ、之ヲ唱導啓発シタル 聖祖ハ正シク世界統一軍ノ大元帥也、大日本帝国ハ正シク其大本營也、日本国民ハ其天兵也、(中略) 日本国ハ正シク宇内ヲ靈的二統一スベキ天職ヲ有ス⁽²⁸⁾

このように、世界統一もしくは世界平和という天職の根拠を日本の宗教に求めるといふ主張は、日蓮仏教のみならず、それ以外の宗教(神道やキリスト教)においても展開されていくことにな

る。

四 日露戦争期

日清戦争時の「文明対野蛮」の公式は、西洋列強の一国であるロシアとの戦争に際しても用いられることとなった。当時、東京帝国大学に在籍中で、いまだ国際協調主義を主張していなかった吉野作造は、日露開戦直後、以下のように日露戦争を肯定した。

近世欧洲の政治的進化の跡を見るに、専制時代より民権論時代に移り、(中略) 独り露国は主義として今尚専制の政治を固執し。大勢趨行の当然たる自由思想の勃興をば強て压抑して仮借する所なし。(中略) 露国は実に文明の敵なり。今若し露国日本に勝たん乎、政府の権力一層強く压制益甚しからん。幸にして日本に敗れんか、或は自由民権論の勢力を増す所以とならん。故に吾人は文明のために又露国人民の安福のために切に露国の敗北を祈るもの也。²⁹⁾

西洋文明一般という観点からすれば、ヨーロッパの一角であるロシアはもちろん「文明国」ではある。しかし、立憲政治や民主制という政治的観点から捉えた場合、ツァーリズムを布いているロシアは「文明の敵」となる。大日本帝国憲法を制定してまがり

なりにも立憲政治を展開している日本は、「文明国」に属し、勝利することで世界の文明化は進展することとなる。

満木峰丸なる人物の以下の文章は、日清戦争時における内村鑑三の義戦論の論理をそのまま日露戦争に応用したものに他ならぬ。³⁰⁾

人類の敵なる露国即ち是なり、此を膺懲して其暴力蛮勇を退くすることを得ざらしむるは、実に我国の天職なり、(明治一引用者注) 二十七八年には、清国の頑迷を覚醒し、今又露国の蛮勇を抑へて、世界文明の爲め、東洋平和の爲に貢献せんとす。

実に露国との衝突は、我国の進歩発達上、止むを得ざるの勢なり、希臘の彼斯に於けるが如く、羅馬のカルタゴに於けるが如く、且又英国の西班牙に於けるが如きなり、進歩発達の階段たるなり、日清戦争に於て、我国は一躍して世界列強の列に入り、今又日露戦争に於て、世界列強の一二の位置に立たんとす、而して太平洋上の主人公となり、大西洋上の主人公たる英国と、東西相応じて、世界平和の爲め、世界文明の爲めに、尽すあらんとす、又可ならずや。³⁰⁾

一九〇二年締結の日英同盟の存在も、日本の方がロシアより進歩発達しているとの見方を強めていた。福沢諭吉門下のジャーナ

リストであつた矢野竜溪（文雄）は、以下のように、西洋列強を「人權發達」の観点から「専制国」と「自由国」に区分し、イギリス、アメリカとともに日本を後者に位置づけ、「専制国」ロシアに対して「宇内人類擁護者の地位」に立っていると主張した。

獨、露同盟は人權の不發達なる邦国の連盟と見るべく、一方に於ける英、米の同盟は人權發達の同盟と看るべし、而て幸にも日本の大勢は人類の福祉を増加すべき此の英、米二国と相提携するに於ては、国内に於ける文物制度が尚ほ此の上に進歩發達すべきは勿論、世界中に於て、最も人權發達を標榜する英、米二国と抱擁し、夫の压制擅恣なる北方の邦国に対して、宇内人類擁護者の地位に立つものなり、豈に亦た壮ならずや。

今や世界人類の福祉より之を觀察し、自由国同盟の繁栄を可とすべきや、將た専制国同盟の勝利を可とすべきやと問はゞ、何人と雖も、前者の繁栄を以て世界の幸福と認めざるもの無かるべし。⁽²¹⁾

五 第一次世界大戦以降

第一次世界大戦中の日本は、山東出兵や二十一か条要求に象徴

されるように、アジアで權益を広げていくが、大戦後の新しい国際秩序のなかで、孤立を深めていくことになる。ここでは、日本が国際的孤立を深めていくなかで、日本の文化や宗教の優越性が強調され、それによって、世界平和や人類救済という壮大な理想を主張する言論が定着していく過程を見ていくこととする。

シュペングラ―『西洋の没落』に代表されるように、第一次世界大戦の発生は、ヨーロッパ人をして近代西洋文明の終焉を意識させたが、日本においても大戦中から西洋文明の限界を指摘し、それに代つて日本民族が新たな文明の創出者として立ち上がるべきだとする氣宇壮大な意見が登場した。政治家・後藤新平は、大戦中に執筆した『日本膨張論』において、大戦の歴史的意義を以下のようにつまえた。

歐洲戦争はこれを内部的に解すれば人間生命の活火が虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協を破壊せんとして爆發したものである。既に生命を失へる旧き文明を破壊して最も自然なる最も健全なる新らしき文明を創造せんとする産みの苦しみ、それが即ち歐洲戦争である。故に歐洲戦争は已に生命を失ふべき十九世紀の老朽文明に最後の止めを刺し、將に開けんとする二十世紀の新鮮なる文明の大誕生を助けんとするものである。⁽²²⁾

そして、「内部に於ては常に調和的、渾一的で、根本的の争闘がない。争闘があつても要するに親戚間、同族間のそれであるから、一朝総御本家なる皇室の御声がかかりがあるとか、又皇室に関する重大事があるとかすれば、直に争ひを止めて協和提携する」という「最も有機的、理想的の民族である」日本民族こそ新文明の担い手としてふさわしく、「我々は先づ精神上、道義上の優劣を決すべき世界的競技に参加して、其のチャンピオンたることに努力しなければならぬ」と主張する。このように、後藤が日本民族を「最も有機的、理想的の民族」と捉える根拠は、日本古来の信仰である古神道にあつた。

言ふ所の古神道の精神とは単に形式的なる狭義の祖先崇拜を意味するのではない。思想的にも、実際のにも、偉大なる力を以て地上に曠業を樹てたる優强者としての祖先教を奉体するの意である。故に我国に於ては偉大なる人物は総て神として祀り、之に神格ありとして敬仰する。即ち神を人間の中に求めて崇拜するのであつて、之を純思想的方面より云へば古神道の精神は最も微妙なる現実主義である。又之を実際の方面より云へば潑刺たる生々發展主義である。信仰の対象を天上に求めず、不可思議界に求めず、英霊の不滅を信じて永劫の力として光輝とする。これ飽迄も生を肯定し、死を否定す

るところの活宗教であり、現世の中に一切の価値と意義とを求めんとする活信念である。語を換へて言へば人間の理想を抽象的の理体に託せず、超自然の造物主に頼らず、祖宗の英霊を以て直に天地に磅礴し遍満し光耀する久遠の生命の発現と見るのである。これ実に空想の宗教にあらざして玄妙なる力の宗教である。征服の宗教であり、支配を求むるの宗教である。⁽³⁵⁾

ここで後藤が触れている古神道は、おそらくは川面凡児の「祖神の垂示」であつたと考えられる。⁽³⁶⁾ 川面の「祖神の垂示」とよばれる古神道は、禊をはじめとする行法と体系的な神学理論を重視するとところに特徴があつたが、秋山真之や鶴沢聡明らがそれに注目し、「川面——引用者注」先生に請うて、偉大なるわが国民性の真髓淵源たるべき根本義を明かにし、もつてわが国運の大興隆に資するとともに、益々進んで、宏大無限なる天職使命の実行を期するを得ば、自他の幸福得ていふべからず」との趣旨のもと、一九一四年一月に高木兼寛を会長として古典考究会が発足、月二回の川面による講演、月一回の『古典講義録』刊行、夏冬の禊会などが行われ、栃木、福岡、ロサンゼルスなどに支部が作られた。⁽³⁷⁾ そうしたキャンペーンにより、川面の古神道は、今泉定助や葦津耕次郎らの神道家のみならず軍、政界、思想界、教育界等に

において広範囲な影響を与えた。⁽³⁸⁾

日本民族が「祖神の垂示」に基づいて人類同化、世界統一の大事業に乗り出すべきだとする、以下の川面の主張が、第一次大戦時、西洋の衰退と日本の発展を意識した多くの者の心を捉えていつたことは想像に難くない。

我等日本民族は、怠る可からず、努めざる可からず、祖神の垂示を發揮して、其の宗義は、世界の有ゆる宗教宗義に超絶し、其の哲学倫理道德は、世界の有ゆる哲学、倫理、道德に超越し、其の政治、法律、財政、経済等は、世界の有ゆる政治、法律、理財、経済に超絶し、其の文学美術も、陸海軍も、乃至、有ゆる理化学的發明、工業商業等も世界の有ゆる国民民族に超絶する所がなくてはならぬとの自覚を有すると共に、実行すべきである。殊に最も注意すべきは、祖神が垂示し給へる神人合一の祭政一致である。神を離れては、宗教、哲学、倫理、道德、政治、法律、財政、経済、文学、美術、軍隊、衛生、商工業等に至るまで、是れ靈魂なき外観の裝飾に過ぎざるものとなる。奈良人形となるに止まるのである。何等の活気なく、生命なく、何等の威厳なく元気なきものとなる。神を離れたる宗教、哲学、倫理、道德等は、永久に伝はることなきが如く、神を離れたる民族も、家族も、国家も、永続することは、出

来ないのである。(中略)人類を同化し、世界を統一せんとする大国民は、其根底に於て、全神の教趣を離るべからざるものである。⁽³⁹⁾

また、この時期、神道だけでなく、仏教においても、日本が世界の精神界をリードすべきであるとの主張が見られた。田中智學と並ぶ近代日本の日蓮主義者として知られる本多日生は、「日本の世界に与へんとするものは、彼等が悶えに悶え、迷ひに迷ひ、争ひに争うて、混乱に陥つて居るところの精神生活に、最後の解決を与へるが、日本の天職であります⁽⁴⁰⁾」と述べ、「法華經の一念三千の思想」の優越性を説き、以下のように、後年の日米戦争を予期するような発言を展開した。

是からの米国は経済的に於ても彼は多大なる富を以て日本を圧迫し、武力の戦に於ても種々なる機械を充実せしめて、日本を圧迫するに違ひない、こちらが十隻の艦を並べて居る時に、彼等は五十隻乃至七十隻の銅鉄艦を浮べて、サアどうだと云ふ、上の方からは何千と云ふ飛行機が来て、東京の天に唸りを打つて爆弾を投下して是でもか是でもかと云ふ、是れでは頭を低げるより仕方あるまい、屈辱に甘んずるより仕方あるまいと云ふ時がある、その時になつても我日本の国を擁護して、日本の天職を發揮するが為めには最後の最後まで決

して恐れを懐かない所の、堂々たる精神を維持して居らなければならぬ、この偉大なる精神力を養ふに就ての、模範者として日蓮聖人に導かれなければならぬ¹¹。

「上の方からは何千と云ふ飛行機が来て、東京の天に唸りを打つて爆弾を投下して是でもか是でもかと云ふ」という表現は、まさに「大東亜戦争」末期の本土空襲そのものである。「日本の天職を發揮するが為めには最後の最後まで決して恐れを懐かない所の、堂々たる精神を維持して居らなければならぬ」、これこそ後年「絶望的抗戦期」を戦い抜いた国民の精神性を表してはいないか。「大東亜戦争」における道義的精神は、すでにこの時期に胚胎していたといえるだろう。

そして、興味深いことに、「大東亜戦争」後の「平和国家」日本を彷彿させるような主張もこの時期に登場している。日蓮宗の高僧を父に持つ、ジャーナリストの石橋湛山¹²は、日本の帝国主義を追い込もうとするワシントン会議開催を控え、日本が率先して、すべての植民地および權益を放棄して、世界の手本を示すべきであると主張する。

我国が大日本主義を棄つことは、何等の不利を我国に醸さない、否啻に不利を醸さないのみならず、却つて大なる利益を、我れに与うるものなるを断言する。朝鮮、台湾、樺太、

満州と云う如き、僅かばかりの土地を棄つることに依り広大なる支那の全土を我友とし、進んで東洋の全体、否、世界の弱小国全体を我道德的支持者とすることは、如何ばかりの利益であるか計り知れない。若し其時に於て尚お、米国が横暴であり、或は英国が驕慢であつて、東洋の諸民族乃至は世界の弱小国民を虐ぐるが如きことあらば、我国は宜しく其虐げらるる者の盟主となつて、英米を膺懲すべし。此場合に於ては、区々たる平常の軍備の如きは問題でない。戦法の極意は人の和にある。驕慢なる一、二の国が、如何に大なる軍備を擁するとも、自由解放の世界的盟主として、背後に東洋乃至全世界の心からの支持を有する我国は、断じて其戦に破るることはない¹³。

後述するように、「自由解放の世界的盟主」としての天職・使命は、戦後、「世界平和の戦士」という言葉に置き換えられるようになる。

一八九二年に「日本国の天職」を発表して「東西両洋の媒酌人」としての天職を主張した内村は、一九二四年に「日本の天職」と題する論文を発表する。三十年以上の歲月は、国際情勢の変化に加えて内村自身の信仰の深化もあつて、西洋文明の捉え方と日本の天職観を大きく変容させた。とりわけ、第一次大戦への参戦（一

九一七年）と排日移民法の制定（一九二四年）は、キリスト教国として期待していたアメリカへの失望をもたらし、代わりに日本こそがキリスト教国としての天職を果たすべきであるとの主張へと変わっていったのである。

世界は復たび純信仰の復興を待ちつゝある。所謂西洋文明は其全盛に達して、此は世を救ふ者に非ずして却て亡す者である事が判明つた。物質文明の極度に達せし米国人自身が其未來に光明を認めずして暗黒を期待して居る。「人類の幸福は如何にして得らるゝ乎」の質問に題し、「世界の富源を開発し尽して」との答は満足なる答としては受取れない。全生涯を金儲け事業の為に費せし者が、老年に近いて実業界を去つて精神界に入らん事を願ふと同じく、今や人類全体が憧憬の目を純信仰に注ぐに至つた。誰か之を供する者ぞ。（中略）日本人ではあるまい乎。仏教が印度に於て亡びし後に日本に於て之を保存し、儒教が支那に於て衰へし後に日本に於て之を闡明せし日本人が、今回は又欧米諸国に於て棄られし基督教を日本に於て保存し、闡明し、復興して、再び之を其新らしき貌に於て世界に伝播するのではあるまい乎。日本は神国であり、日本人は精神的民族であるとは自称自賛の言ではない。耻を知り名を重ずる点に於て日本人は世界第一である。⁽⁴⁾

キリスト教と日本の伝統宗教との違いはあるが、精神面で世界をリードすべきであるとの主張は、川面凡児や本多日生らのものと異なるところがない。内村門下のなかで「大東亜戦争」を「聖戦」視する者がいた⁽⁵⁾ことも宜なるかなである。

一九三三年二月の国際連盟総会で首席全権として連盟脱退を声明したことにより、帰国後は凱旋將軍のように迎えられ熱狂的な支持を集めた松岡洋右は、これを契機として、日本主義的な言論を積極的に展開するようになった。

日本民族本来の使命とは何ぞ？ それは中外に施して悖らず、古今に通じて誤らざる皇道精神を以て、世界人類の悩みを救ふことではなければならぬ。（中略）欧米諸国民が、いかに物質文明の行き詰りに懊悩し失望しつゝ、あるかといふことを知ることが出来る。そして彼等のうちの或るものは、明らかにその物質文明に疑問をもち、東洋特有の精神文明に、異常の関心を有ちつゝ、あるものさへもある。（中略）私は、世界の誤まれる物質文明を是正して、人類を救ひうるものは、究極において、日本民族より外にないといふことを確信するものである。⁽⁶⁾

一九四〇年八月、外務大臣となっていた松岡によって「大東亜共栄圏」という用語が初めて公表されるにいたるが、ここには、

すでに、皇道精神によって世界人類を救済するという「大東亜共栄圏」の理念がはっきりと打ち出されているのである。

その後、中国との全面戦争、さらには米英との戦争に突入して戦時体制が強化されていくなかにあって、「大東亜共栄圏」や「八紘一宇」などの言葉を用いて、新しい平和秩序を創出するための「聖戦」と位置づけ、国民に奮起を促す言論が頻発するようになるのは周知の事実である。常識的に考えれば、戦争を起こしている時点ですでに平和を攪乱しているといえる。にもかかわらず、世界平和という崇高な使命を有する日本には、平和を創出するための戦争を起こすことが許されるという論理が展開されたのである。詩人・萩原朔太郎は、日中全面戦争下において以下のような発言をしている。

今日、西洋の相対的権力主義の文明、力の文明に対して、東洋の理想である絶対的平和主義の文明、美の文明を防制しますのは、今日アジアに於て、ただ日本人しかない、これが日本の使命なのであります。しかし今日、すべての永遠平和のイデーを防制するために、我々は止むを得ず、戦ひの中に身をおかなければならない。過去に於ける日露戦争も、また只今の日支事変も、実にかうした文化的な、自衛の目的から、止むを得ず行つた戦ひでありました。我々の文化の目的とす

る使命は、もとより絶対の平和主義、王道精神によるものでありまして、決して西洋人の考へるやうな、好戦的な、侵略的な国民性から出てゐるものではないのであります。⁽⁴⁷⁾

おわりに

一九四五年の敗戦以降、日本の天職を主張する言論はぱったり途絶えた。しかし、そうした精神性は戦後の混乱期を生きていかにざるをえない国民の中に、依然として保たれていたように思える。

石橋湛山は、敗戦直後に「更正日本の門出——前途は実に洋々たり」と題する論文を発表し、「我が国は、なる程従来の領土の或部分を失い、又軍備産業等にも制限を受けざるを得ない。併し此等が抑も生々發展せんとする日本国民に取つて何程の妨げをなそう」⁽⁴⁸⁾、「今後の日本は世界平和の戦士として其の全力を尽さねばならぬ。茲にこそ更正日本の使命はあり、又斯くてこそ偉大なる更正日本は建設されるであろう」と高らかに訴えた。こうした決意表明は、湛山をして、その後、政治家へと転身させ、東西冷戦体制下において「日中米ソ平和同盟」という壮大な構想を思い描かせたのである。

戦時下、師の牧口常三郎とともに治安維持法違反と不敬罪の容

疑で獄に繋かれ、戦後、獄死した牧口に代わり創価学会を受け継いだ戸田城聖は、以下のように、敗戦によって真の道義と平和の道を目指すことになった日本民族の欲求を満たすものこそ日蓮仏教であると主張した。

戦いに敗れたわが国が、真に道義と平和を愛好する民族として再起するためには、正しい宗教と正しい思想を根底において、そのうえに政治、経済、文化等を打ち立てなければならぬ。ないことはいうまでもありませんが、この欲求をみたしうるものが、わが日蓮正宗の哲学であり、その根本が大御本尊様なのであります。⁽³⁰⁾

創価学会は、戸田の死後、日本最大の宗教団体に発展するが、そうした発展の一因として、世界平和という日本の天職を再認識する人々の意志を汲むことに成功したという点もあげられるかもしれない。

日本社会党委員長でクリスチャンであった河上丈太郎は、衆議院外務委員会における池田勇人首相への質問のなかで、次のような発言を行った。

私はヤソ教であるので、その立場から考えるのですが、日本になぜ原爆が落とされたのか。世界にたくさんの民族があるけれども、どこにも落ちていない。日本にだけ落ちたという

理由がどこにあるか。私はその意味を自分なりに解決をいたしておるのであります。それは何かと言うならば、日本が世界の平和をもたらすために選ばれた民であるというのが、この原爆の中における意味ではないか、私はこう解釈する（中略）ユダヤ民族は神が第一の選民としたけれども、第二の選民はわが日本民族だ、原爆の犠牲を通じて日本民族は平和のために大きな使命を持つておる民族である、これはあの大きな犠牲と災害の中から生まれできたものである、こう私は言うておるのです。⁽³¹⁾

日本民族を「第二の選民」とする点は河上特有の考えであろうが、世界唯一の被爆国として大きな使命があると捉え、「平和国家」建設に邁進してきた人々も存在していたことは事実であろう。

日本の天職論は敗戦によって潰えたのではなく、それ以降は、悲惨な戦争を起こしたという反省の意識も伴い、真の世界平和をもたらすものとして存続し、戦後の「平和国家」建設の原動力の一つになったとはいえないだろうか。

戦後八〇年近くになる現在、一般的に天職や使命という言葉さえほとんど用いられなくなり、ましてや日本の天職論は全く影を潜めた感がある。しかし、国家神道の再建に警鐘を鳴らす声もあ

り、いずれそうした議論が再燃する可能性も皆無ではない。我々が胆に命じなければならぬのは、日本の天職論が過去に戦争の推進力として作用したという事実である。そうした議論の再燃は、再び日本をして戦争の道へと追いやらないとも限らない。国家の枠を超える普遍性を有しない限り、歴史の過ちを繰り返す危険性があるだろう。日本国あるいは日本国民としての天職・使命ではなく、普遍的な人間としての天職・使命を自覚することが求められているのではないだろうか。

注

- (1) 吉田裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』中公新書、二〇一七年、二五～二六頁。
- (2) 水谷真紀『時局下の少女美——『少女の友』における主筆・作家・言論統制』『昭和文学研究』第五十三集、二〇〇六年九月、一五頁。
- (3) 漱石は、小説『三四郎』において、「広田先生」をして、「こんな顔をして、こんなに弱っているは、いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですわね。尤も建物を見ても、庭園を見ても、いずれも顔相応の所だが、——あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだから仕方がない。我々が拵えたものじゃない」と言わしめている。夏目漱石『三四郎』岩波文庫、一九三八年、二三頁。
- (4) 『読売新聞 夕刊』一九四二年二月九日付。当時の夕刊の日付は翌日も

のようになっていた。

- (5) 松本三之介「国民的使命感の歴史の変遷」、竹内好・唐木順三編『近代日本思想史講座 8 世界のなかの日本』筑摩書房、一九六一年。
- (6) 姜克實「書評 望月詩史著『石橋湛山の〈問い〉』——日本の針路をめぐるて」『同時代史研究』第十五号、二〇二二年九月、六八頁。
- (7) ケネス・B・パイル著・松本三之介監訳・五十嵐暁郎訳『新世代の国家像——明治における欧化と国粹』第七章 国民的使命感の探究。
- (8) 『中江兆民全集』第十一卷、岩波書店、一九八四年、二二三～二四頁。
- (9) 谷川稜「内村鑑三——「天職」の地理学」講座 東アジアの知識人』第二卷、有志舎、二〇一三年、一二九頁。
- (10) 陸羯南「内治干渉論」一八八九年八月、『陸羯南全集』第二卷、みすず書房、一九六九年、一九八頁。
- (11) 陸羯南「伊勢の太廟、皇室と行政府との関係」一八八八年九月、『陸羯南全集』第一卷、一九六八年、五三二～五三三頁。
- (12) 内村の天職論に関する優れた論考に、小原信「評伝 内村鑑三」(中央公論社、一九七六年)がある。
- (13) 『内村鑑三全集』第一卷、岩波書店、一九八一年、二八六頁。
- (14) 同前、二九〇頁。
- (15) 尾崎行雄『内治外交』博文堂、文陽堂、一九九三年五月、三七頁。
- (16) 同前、四〇～四一頁。
- (17) この社説は『福澤論吉全集』に所載されていたため、長い間、福沢の執筆によるものとされてきたが、平山洋は、その文体や語彙、そして内容から判断して、福沢ではなく石河幹明の執筆によるものと推定している。平山洋『福沢論吉の真実』文春新書、二〇〇四年、一〇五頁。
- (18) 『福澤論吉全集』第一四卷、岩波書店、一九六一年、四九一～四九二頁。
- (19) 内村鑑三「日清戦争の義」一八九四年九月、『内村鑑三全集』第三卷、一九

- 八二年、一〇九―一二頁。
- (20) 同前、一〇六頁。
- (21) 内村鑑三『時勢の觀察』一八九六年八月、『内村鑑三全集』第三卷、二三三頁。
- (22) 尾崎行雄『支那処分案』博文館、一八九五年一月、二三〇頁。
- (23) 渡部万蔵『世界大勢論』東京堂、一八九九年三月、九四頁。
- (24) 同前、一〇七頁。
- (25) 『牧口常三郎全集』第二卷、第三文明社、一九九六年、三九三頁。
- (26) 同前、三九八―三九九頁。
- (27) 同前、四一三―四一四頁。
- (28) 田中巴之助『宗門之維新』師子王文庫、一九〇一年九月、一七頁。
- (29) 吉野作造『露国の敗北は世界平和の基也』一九〇四年三月、『吉野作造選集』第五卷、一九九五年、九頁。
- (30) 満木峰丸『満洲之地理歴史』開發社、一九〇四年四月、七四―七六頁。
- (31) 矢野文雄『世界に於ける日本の将来』近事画報社、一九〇五年三月、五二―五三頁。
- (32) 後藤新平『日本膨張論』通俗大学会、一九一六年二月、七―八頁。
- (33) 同前、一五一頁。
- (34) 同前、一九六頁。
- (35) 同前、一八五頁。
- (36) 川面の生涯に関しては、金谷真『川面凡児先生伝』稜威会政治連盟、一九二九年)が詳しい。同書によれば、川面が北軽井沢で禊の会を主宰していた時、当時鉄道院総裁であった後藤が近くの二度上駅(草軽鉄道)を通過した折に、川面の禊を賛美したという(二五三頁)。
- (37) 同前、一九七―二〇八頁。
- (38) 創価教育学会を設立する牧口常三郎と戸田城聖も一時期、川面の禊会に参加していた。拙稿「書評『創価教育の源流』編纂委員会『評伝戸田城聖——創価教育の源流第二部』」創価教育』第十五号、一九〇頁。
- (39) 川面凡児『建国の精神』稜威会本部、一九一七年五月、一五一―一五三頁。
- (40) 本多日生『日蓮聖人聖訓要義卷十』大鐘閣、一九二二年五月、二二六頁。
- (41) 同前、二二八―二二九頁。
- (42) 石橋湛山と日蓮仏教との関係については、拙稿「石橋湛山と日蓮仏教」『石橋湛山研究』第三号、二〇二〇年三月を参照。
- (43) 石橋湛山『大日本主義の幻想』一九二二年八月、『石橋湛山全集』第四卷、東洋経済新報社、一九七一年、二九頁。
- (44) 内村鑑三『日本の天職』一九二四年一月、『内村鑑三全集』第二十八卷、四〇六―四〇七頁。
- (45) 前掲『評伝 内村鑑三』二二三―二四頁。
- (46) 松岡洋右『青年よ起て』日本思想研究会印刷所、一九三三年二月、二二―二四頁。
- (47) 萩原朔太郎『日本への回帰』白水社、一九三八年三月、一一二―一一三頁。
- (48) 石橋湛山『更正日本の門出——前途は実に洋々たり』一九四五年八月、『石橋湛山全集』第十三卷、一九七〇年、五頁。
- (49) 同前、六頁。
- (50) 戸田城聖『民族復興の道』一九四八年一〇月、『戸田城聖全集』第三卷、聖教新聞社、一九八三年、四〇七頁。
- (51) 河上丈太郎『原爆の唯一の被害国の任務——池田総理との一問一答から——』一九六二年五月、河上民雄編刊『河上丈太郎演説集』一九六六年、八八―八九頁。
- (52) プロテスタントの作家・佐藤俊は、国家神道の再建について、「日本で注意しなければいけないのは、国家神道の再建です。多くの人は「ばかばかしい」と思うかもしれませんが、日本の場合、「神道は慣習だ」「宗教ではない」と

いう形になることに気を付けなければいけません」と指摘している。池上彰・佐藤優『宗教の現在地』角川新書、二〇二二年、二六一頁。